

南画を描く話

中谷宇吉郎

青空文庫

昨年の春から、自分では南画と称しているところの墨絵を描くことを始めた。

南画を描くなどというと、段々年をとると、油絵よりも墨絵の方が良くなるそうだねなどと冷かされる^{ひや}こともある。しかし私の場合は、そういう趣味が枯れて来たなどという洒落^{しや}れた話ではなく、もっと現実な理由があるのである。

それはこの頃のように段々忙しくなってきたは、どうにも油絵など描いている閑^{ひま}はなくなってしまったからである。

閑のあるなしは、時間の問題ではなくて、心持の問題だということとは真理であるが、それにしても、油絵のように、正味十時間

とか十五時間とかとられるのでは、どうにもやり切れない。

その点墨絵の方は大変便利であつて、描きかけたら、一時間か二時間あれば大抵の絵は出来上る。もつともいくら初年生の絵描きでも、少しは構図も考えたり、物を見たりする必要はあるので、全体としたら一時間で出来上るわけではない。しかし物を見たりする方は、いくらも時間のやり繰りが出来るので、正味の時間が潰れる^{つぶ}ことはないので、大変助かるのである。少し不心得な話であるが、興味も必要も余りない会議の席などに何時間も唯顔^{ただ}を並べているだけの時などは、卓の上にある羊齒^{しだ}の葉の形を見ているというような場合もあり得るわけである。

この正味の時間をとられるかとられないかということが、私の

南画を始めた決定的要素であつたのであるが、少し描いて見ると、段々面白くなつて来て、この頃は自分ながら少し可笑おかしいくらいの熱の揚げ方である。もつともそんなに時間がないのなら、何も新しい道楽など始める必要もないはずである。それにはたから見たら随分無理なやり繰りをして、妙な墨絵を描いているところを見ると、よほど道楽者に生れついているらしい。

その弁解をするようであるが、実はこういうことも少し考えているのである。

それは、前に「墨色」という雑文を書いた時に詳しく言つたように、寺田先生てらだの墨流しの研究や、墨と硯すずりに関する物理的研究を讀んで、東洋の精神の一つのあらわれといわれている墨色という

現象について、非常な興味をいだいたことがあった。そして今に
停年にでもなったら、少し墨色の科学的な研究をして見たいとい
う希望をもったことがある。

それで機会があるごとに、良い墨絵を見たり、墨の話聞いた
りしていたので、非常な名墨と駄墨との色の差くらいは分るよう
になった。そうになると、やはり自分でも少し描いて見たくなつて、
とうとう墨色の科学研究に関する基礎技術の練習を始めること
になったわけである。

前に油絵を始めたのは、寺田先生の油絵を見て羨しくなつたの
が機縁であつた。大学を卒業して、先生の助手になつた時に、初
めて油絵具というものを買つた。そして油絵具にはいくら油をさ

うらやま

しても色は淡く^{うす}ならない、そういう場合には白を混ぜるのであるという知識だけを基にして、十枚ばかり色々と工夫して油絵を描いて見た。

十枚目くらいになって、やっと自信のある作品が出来たので、先生の御宅^おへ持つて行つて御目にかけた。そしたら先生から「ふうん、およそ油絵というものを少しでも習つた人ならば、こうは描くまいという風な工合に描いてあるね。なかなか面白い」と褒められた。それに勇氣を得て、その後益々精進することになったわけである。

ところで、今度の南画にも、もう亡くなられた先生との直接的な機縁があるのには、自分でも少し驚いている。

もう一昨年のことであるが、その頃まだ伊東^{いとう}で病後の静養をしていた私のところへ、津田青楓^{つだせいふう}さんから、或る日小さい小包が届いたことがあった。あけて見たら、一尺五寸角^{しゃくすかく}くらいのくしゃくしゃになった紙片に淡彩の墨絵を描いたものがはいっていた。書架と花の絵で、その下に、大正八年一月五日寺田寅彦^{てらだとらひこ}と、毛筆でローマ字の署名がしてあった。

同時に手紙が来て、戸棚の隅を整理したら、反古^{ほんこ}にまじってこの絵が出て来たから君にあげると書いてあった。大正八年といえ、丁度先生があの大患でずっと休まれる直前のことであつて、胃の工合がもう大分良くなかつた頃である。

その前年の秋には『中央公論』に「津田青楓君の画^えと南画の芸

術的価値」が出ているが、この頃は、時々先生は津田さんのところへ遊びに行かれて、毛筆淡彩の素描などを試みておられたらしい。その時の絵が一枚反古にまぎれ込んだまま二十何年ぶりで見つけ出されたのである。

私は先生の絵は一枚も持っていなかったもので、本当に夢かとかかり喜んだ。特にこの絵は非常な傑作で、簡単な素描ながら、その気韻きいんと香りの高さには心のしずまるものがあつた。覗のぞき込んだ細君まで「何だか音が聞えて来るような絵ですね」とわけの分らぬことを言う始末であつた。

早速表装をしてもらつたら、すっかり新生して、見ちがえるようになった。私は嬉うれしくてたまらないので、上京の時持つて行つ

て、誰れ彼れに見せて廻つて、大得意であつた。

岩波いわなみさんの所へ行つた時に、

丁度安倍能成あべよししげさんが見えていた

が、この絵を見せたら、「うん、これは寺田さんの生涯の傑作だ。大事にし給え」と言われた。岩波さんは残念がつて「君がそれを専有するのは少し怪けしからん。僕にくれないか。そうすれば皆に見せられるから」と言われたので、慌あわててしまいこんで伊東へ逃げ歸つた。

こういう掛物は三日以上かけ放して置いてはいけないということなので、時々かけて見ては独りで喜んでいるうちに、とうとう自分でも何か描いて見たくなつてしまった。そして本当に始めてしまったのである。

初めに描いて見たのは、雪の結晶の絵である。この題材は後から考えて見ると、なかなか巧いものを選んだものと自分にも思われる。第一今までに余り知られていない型の結晶を描いておくと、少しくらい口の悪い連中に見せても「へえ、こういう結晶もあるかね」と、その方に氣をとられるという利得がある。その上、雪に興味をもっている人たちに見せると、大抵は一枚欲しいものですねと言ってくれる。

もつともそれもこの頃のように、少し絵らしくなってから話であつて、初めに描いて見た頃は、どうにもならないものであつた。淡墨でしかも相当墨を淡くして描く方が有利であることは直ぐ分つたが、それでは沢山の結晶を並べると、余り単調になる。

というよりも、どうにも絵にならない。

それに立体的に発達した結晶は、やはり濃淡をつける必要があるし、その上省略がなかなかむつかしい。おだやかな伊東の冬を火燧こたつにあたりながら、顕微鏡写真を眺めては、結晶の特徴を考えて見るのは、ちよつとよかった。その方はすぐ考えがまとまって、必要な線も案外簡単に発見出来た。少くともそういう風な氣持にはなれたのであるが、表現しようとなると、話がまた別になる。散々苦心をして結局出来上ったものは、雪菓子つづみがみの包紙紙のようなものであった。氣韻どころの騒ぎではない。二、三枚描いて見たが、ちつとも進歩の形跡が見えないので、そのままにして、時機の熟するのを待つことになってしまった。

その後大分経^たつてからのことであるが、或る日新聞の写真を見て、一つの発見をした。それは知った人の顔が沢山並んで小さく写っている写真であつたが、それが皆ちやんと誰れ彼れの顔に見える。一人の顔が小豆粒^{あずきつぶだい}大に写っている写真である。よく氣をつけて見ると、顔の形をなすものは大部分が黒くて、その一部に白い斑点^{はんでん}があるだけのものである。中間の墨色のような所は殆^{ほと}んどないし、白い斑点の形も殆^{かっ}んどどの顔でも同じような恰好である。それでいて皆の顔にそれぞれの特徴が出ていて、表情までも分るのであるから、これは大したことだと感心した。後から考えて見れば、専門の絵描きの人には一笑に附されるにちがいない分り切った常識であろうが、その時はひどく感心した。

こういう場合、原因としては、人間の眼が恐ろしく敏感であるからだと言っておけば、先ず無難である。しかしそれは全くの逃げ口上で、敏感といつても、何にどう敏感なのかが分らなくては余り意味がない。それで虫眼鏡めがねを持ち出して、その写真の部分を拡大して調べて見ることにした。巧く行ったら、黒く出ている顔の輪郭とか、光の当たっている所即ち顔立かおだちを示す白い斑点とかの形に、微小ながらちゃんとした差があることが、分るかもしれないというつもりであった。

ところが新聞のあの粗い網目では、拡大して見ると、点ばかり見えて、とても輪郭の差などが測れるわけのものではないことが直ぐ分った。もつともあくまで分析的に調べたら、勿論もちろん点の大小

や濃淡、それに僅かなその配置の差などがあるにはちがいない。
そしてそういう色々な要素の差の綜合効果が、顔立や表情の差
となつて見えるのである。

この議論は、結局顔が似るということの形態学まで行かなければ話が納らない。おさましかしそういう千古の謎にかかわっていることは止めて、や先へ急ぐことにする。

今の場合と同じことを絵について言うと、極めて簡単なタッチで、小豆粒大の人の顔を見分けさせ、その上表情まで出していることになる。そしてそういうことが可能である所以は、ゆえん描かれたものの形や色にあるというよりも、むしろ見る人の眼と頭とに具
有されている各種の要素についての差の綜合認識作用にあるので

あろう。

そう考えれば話は大変巧いので、絵の良し悪しあの責任は、半分は見る人に負わせられることになる。特に墨絵のように簡単な線と一色の濃淡だけしか使わないものでは、この見る人の眼と頭との作用を極度に利用する必要がある。

こういう風に言つて見ると、結局東洋画の真髄は観かん者じゃを共同製作者とするにあるという昔からの言い旧ふるされた言葉を、妙な理窟で解説しただけのことだといわれるかも知れない。しかしまあそれでも良いということにしよう。

ところでこういう理窟が分つたとして、それを実際に応用して名画を描くとなると、どうしてよいか、ちよつと困つてしまう。

以上はいわば精神論だけであつて、それを活^いかす技術を研究しないでは、この頃流行の或る種の議論見たようなものである。もつとも蘭^{らん}の葉一枚描くことも習わないで、名南画を描こうというのであるから、困るのは当然である。

それから暫^{しば}く経つてのことである。

或る日驪^{りぎん}山莊^{そう}の秦^{はた}さんのところで、秋田のきりたんぽだの雪^ゆ菜^{きな}だのというものを、津^つ田さんと二人で御馳走^{ごちそう}になつたことがあつた。その時津田さんが、画帖に印度林檎^{りんご}を素描で描かれるのを側^{そば}で見えて、はたと思ひ当ることがあつた。津田さんは初めて皿を描いて、その上に林檎を描かれたのであるが、じつと林檎を眺めながら、輪郭の一部を描き、ついであの印度に特有な縦^{くぼ}の凹

みに当る部分に一本の線を入れられたのであるが、その線をひくのに、津田さんは余所眼よそもめにも見える位極めて慎重であつた。そうしたら急にただの林檎が印度になつた。あの石を真綿できゅつと締めつけたような感じの縦の凹みが、一本の線だけで出るというのは、観者の頭の作用を巧く利用しているからにちがいない。

要するに人間というものは誰でも、すべての物について、単にいくつかの要素を抽象した像だけを頭の中にもっているものらしい。それでそういう像を頭の中に再現してやれば、それで満足するのではないかと思つてみた。そうすると、観者を共同製作者とするための一つの技術は、観者の頭の中にある沢山の線の中の一本をぴんと鳴らしてやればそれで良いので、後は共鳴現象に似た

作用で、観者が初めからもっている像が再現され、それが立派な絵に見えるものらしい。

随分独断的な話であるが、南画の秘訣ひけつはここにあるということに決めた。こういう妙なしかもぼんやりしたことでも、とにかく何かの手掛りが出来たので、大いに勇氣を得て、また勉強を始めることにした。

そういうつもりになって、色々のものをよく見ようとしたのはあるが、勿論肝腎かんじんな線がそう簡単に見えるはずはなかった。それでも頭の中の像と実物とを見較みくらべながら、そういう線を探して行くと、時にはそれらしいと氣のつくこともあった。しめたと思つて早速描いて見ると、勿論思うような形の線にはならない。

しかしその方は単に練習の問題であるから、話は簡単である。練習の方もそう時間はかけられないので、なるべく最小労力でとにかく見られる程度のことので我慢することにした。最小労力で胡魔^{ごま}化^かす術は実験の方で大分こつが分つていたので、墨の濃度を色々かえたり、線の形だの太さだのを工夫したりして、順序立てて色々やって見て、偶然に巧いところにぶつかろうという余り正当でない方法を採用することにした。

どうも不心得な南画家であるが、こういう調子で二、三カ月大分描いて見た。

大抵は描いた直後はなかなかの傑作に見えて、翌日の朝出して見るとひどく下手な絵に見えた。そういうことを繰り返している

うちに、今度は段々墨色が気になり始めた。

腕の方を目立たなくするには、比較的うす淡い墨を使つた方が無難らしいのであるが、淡くすると、今度は墨色がいかにも汚く見えて来て困つた。どうせ三円か五円の油煙墨ゆえんずみのことであるから、淡くすると妙に汚い茶色になつて、一度気になり始めると、どうにも我慢が出来なかつた。なまじつか昔金沢かなざわで中村皓さんの『名墨墨色図鑑』などを見せてもらつて、その印象が残っているだけに厄介である。

中村さんの『墨色図鑑』には、唐墨とうぼくの思わず眼をみはるような美しい墨色がいくつも載のつていた。中村さんは「この色でしょうね、幼児の瞳ひとみをのぞいたような感じというの」とそのうちの

一つを指して教えてくれた。その青みを帯びた透明な黒さとでもいふべき墨色を思い出して、ああいう墨で描いたら、僕の絵だつてきつと巧く見えるだろうかと思つているうちに、段々それが確信に變つて来て、今までの墨では余り描く元気がなくなつてしまつた。

ところが世の中は不思議なもので、思いがけぬ所から、思いがけぬ名墨が手に入るようなことになつた。或る所で臆おくめん面もなくこの頃南画を練習していますなどと話をしたら、暫しばらくして、判はんをてんこくか作つたらどうだといつて、丁度その頃札幌へ来ていた篆刻家を紹介してくれた人があつた。それは平井榴所氏といつて、陶印とういんが得意な人であつた。

さすがに少し恥かしい気もしたが、度胸をきめて、一組頼むことにした。大分経ってから、平井さんがやつと出来ましたと言つて、その判を持つて来てくれた。早速拝見すると、大変よい出来で、特にそのうちの一つがひどく気に入ったので、御礼おれいを言つた。そうしたら平井さんが大変喜んで「実は私もこの方は近来にない出来だと思つていたんです。この判の味が分るようなら、先生もなかなか眼があります」と褒めてくれた。そして「僕は滅多に人に頼まないのだが、一つ何か絵を描いて、この判を押してもらいたい」ということになった。それではと、速座に雪の絵を描いた。

平井さんは、その後間もなく九州へ歸つて行つたが、暫くして

手紙と小さい小包とが届いた。手紙には「先日あなの雪の絵はなかなか良いが、あの判を貴方あなたの所しゅにくの朱肉で押されてはちよつと困る。別便で朱泥しゅでいを少々送ったから、今後はそれを使つてもらいたい。それから墨もあの墨では困る。唐墨を一本送ったから、それで今一枚雪の絵を描いてもらいたい。それから紙もあの紙では困るので、玉版箋ぎよくはんせんを送った」という意味のことが書いてあつた。

小包をあけて見たら、その通りにちゃんと揃そろつていた。どうも少し驚いたが、唐墨の試験に絶好の機会と、早速磨すつて色を見ることにした。ところが、その墨は正まさに夢想していた通りのものらしく、秘蔵の竜溪石りゅうけいせきでそつと磨つて見たところ、最初の手触てざわりからもうただの墨でないことがすぐ分つた。なるほどフライパ

ンの上でラードを磨るような手触りとは、こういうのを言うのだと感心した。墨は軟くしかも硯の面^{やわらか}に吸いつくように動いた。^{すずりおもて}

墨色も申し分なかった。僅かばかりの青みが深い所でその黒の基調をなしているような色であつた。この墨を思い切つて淡くして、玉版箋の上に、雪の結晶を一つ描いて見た。なかなか良い出来である。すっかり乾くのを待つて、つくづく眺めると、どうも墨とは思われないような色である。雪の結晶はあの透明な水晶細工の姿を白い紙の上に現わし、初めて顕微鏡で結晶を覗いた時の^{のぞ}感じが出て来た。あとになって見ると、それほどでもないのであるが、その時はそういう気がした。

墨色は濃淡によつてまるでちがった色になった。それで今度は

線の形と色の濃淡との組合せになるので、急に実験の範囲が広くなって来た。ところが困ったことには、平井さんの手紙にはまだあとがあつた。「朱泥は呈上つかまつるべくそうろう可仕候ねがいあげそうろう唐墨の方は進呈致いたしかねそうろうあいざんぶんご兼候間存分御試用の後御返送を願上候」というのである。当然のことである。

それでは実験は急がねばならないので、手当り次第に色々なものを写生してみた。中には巧く出来たものもあるし、むずかしくて急にはどうにもならないものもあつた。それでも熱帯魚のグッピーだの、コスモスだの、雑草の図だのというものは、どうやら絵になったらしい。

少し熱中して来たので、今度は鑑賞家を必要とすることになつ

た。その厄やくに遭あつたのは、近所に住んでいる吉田洋一よしだよういちさんである。余り度々見せるので、少々うるさくなつたらしく、なかなか褒めてくれない。グピーの図を見せると、「これは八大山人はちだいさんじんの焼直やきなほしだね」とすぐ見破やぶつてしまうし、コスモスの絵は矢やぐる車草まそうかと思つたというので、いささか出鼻でばなを折られた。もつとも説明をきくともつともなので、要するに墨色が余り良いので、花が紫色に見えたというのである。しかし全体としては、進歩の傾向にあると褒めてくれた。

もう一日もう一日と思つていゝうちに、一カ月近く経つてしまつた。どうしても墨を返さなくてはならない。とうとう決心して「今この墨と別れるのは女房と別れるよりも辛いつらが」という手紙

をつけて、送り返してしまった。手紙の方は家庭争議の種になるし、今更もとの駄墨で描く気はなし、当分のうちは意気銷沈しょうちんしていた。

これで南画とも縁切りになりそうなくらい銷沈していたので、色々な同情者があらわれた。そして様々な経緯の末、結局二本唐墨を貰もらったので、急に家が賑にぎやかになった。しかし同じく唐墨といつても、墨色はそれぞれがって、やはり平井さんの墨のような色は出なかった。結局散々頭をしぼった末、一生一代の名文の手紙を書いて、とうとう平井さんからその墨を譲り受けて、やっと落付おちついた。誠に芽出度めでたい結末になったわけである。

何でもこの墨は、まだ北京ペキンに日本の大使館のあった時代に、そ

の武官が或る人に頼まれて、三本北京で手に入れたのだそうである。そしてその一本は誰とか、今一本は誰とかの手許てもとにあるという由緒付きの墨だという話であった。

この墨色が如何いかに美しいかということを語る話がある。それは或る晩吉田さんが遊びに来ていて、また私が南画を描き、吉田さんがそれを見るところということになった。そのうちに一つ合作を武たけみ見国手こくしゅに贈ろうじやないかという話が持ち上った。それで先ずあいかわらずの雪を描いた。そしたら吉田さんが、速座に *Il neige doucement sur la ville* と仏蘭西語で賛さんをした。私は聊か度胆いささどきもを抜かれて「巧いものだなあ」とひどく感心した。吉田さんはにやにやしながら「なに、ランボウの焼直しさ」と済ましていた。

それを送つてからひとつき一月くらいして、上京のついでに武見さんの家を訪ねた。そしたらその絵がちゃんと表装されて、床とこの間にまかかつていた。大変よい表装なので、大いに感謝の意をこめて、一体何処どこでこういう表装をしたのかと聞いて見た。そしたら「博物館でいつも国宝の修理をしている表装屋に頼んだんだよ」という答であつた。そして「なかなか良い墨だそうだね。その表装屋さん、こういう墨は珍しいと大変褒めていたよ」ということであつた。大いに力を得て、「それだけですか」と聞いたのであるが、「うんそれだけさ」という返事で、聊か物足らなかつた。

紙は満洲まんしゅうへ行つた時に、奉天ほうてんの城内までわざわざ行つて沢山買つて来たし、墨も待望の品が手に入つたし、判も朱泥も揃

ったので、もうあとは描きさえすればよいわけである。ところがそのうちにそろそろ北海道の早い木枯こがらしが吹き始める頃になった。写生をするにも野趣のある草花はないし、花屋で売っている華はなかな花を描くには実力が要いるし、ちよつと困った。

それでやはり摸写もしやをすることにした。もつとも今更蘭竹らんちくから

始めて、十年猛勉強をして、やつと田舎廻りいなかまわの安画家の高弟程

度の絵が描けるようになったのでも余り面白くない。色々考えた

末、今までの日本画家が余り描かなかったような題材を選べば一

番安全であるという明白な事実気がついた。それで『日本魚類

図説』と『日本蟹類かにるい図説』とを買つて来た。

この本はどちらも原色版の写真の集成で、ちゃんとした学術的

なものである。芸術的な意図は全然ない本であるが、精密な写真と忠実な色彩とでなっている魚や蟹の図は、よく見ていると益々美しく見えて来る。ちよつと時間の半端はんぱが出たりくたびれたりした時などに、当てもなく開いて、色々な魚や蟹の姿に見入りながら、どう描いたらこれが名画になるかなと、ぼんやり考えているのは、大変楽しみなものである。そういう目的には、どうも絵よりも写真の方が良いらしい。その良い例は内田清之助うちだせいのおすけ氏の『画と鳥』という本に沢山出ている。その中には、色々な鳥の生態写真と、丁度それに相応した姿の絵とが沢山あるが、開いて行くうちに、はつと「これは絵になる」という気がするのは、殆んど全部生態写真の方である。もつとも絵の方は抽象した像であり、写

真の方は「全体」であるから、それが当然なのかもしれない。

二つの図説を根気よく見ているうちに、大分魚と蟹の顔をおぼ

えた。丁度 わきもとらしくしけん 脇本樂之軒 氏から『新撰名品 そうらん 綜覧』の第一輯 しゅう が届

けられたが、そのうちの かざん 華山先生の異魚図 いぎよず なども、一目見てすぐ

つばめうおと分つて、独りで得意になった。異魚 そのなをしらずうんぬ 不知其名云

々 ん と賛をしてある絵であるが、あそここの所に *Platax teira* と学名

の賛をしたら、ちよつとペダンティツクで面白いかもしれないと、

つまらぬことを考えて一人で悦 えつ に入っていた。こういう本はいわ

ば文明の利器であつて、或る場合にはなかなか便利なものである。

魚はかさごといしだいを描いて見たが、この方は華山先生の

絵があるので、どうも見劣 みおと りがしていけない。それよりもはなび

しがにの方がよほど上出来である。この蟹は螯こうきやく脚がむやみと大きく、それが小さい甲羅こうらから二本ぬつと出ている姿は、まるで団子だんごに丸太まるたをつきさしたような恰好かつこうである。四本の歩脚ほきやくは、これがまた全く釣合つりあいというものを無視した細いもので、妻楊つまよう子じを両側に四本ずつさしたような始末である。一体こういう馬鹿げた形のものが、生きていることさえ不思議なのに、実際に南海の磯いそのほとりに地質年代の昔からずっと生存を続けて来ているということとは、全く論外の沙汰さたである。こういう形が一番生存に有利だとはどうしても考えが及ばない。しかし其処そこにはやはり何か本当のものがあるらしく、なるべく特徴を現あらわすようにと忠実に描きあげて見ると、やはり蟹の化物ばけものには見えなくて、奇妙な形

の蟹に見えるところが面白かった。

この蟹の怪奇な面影は、勿論その巨大な螯脚にある。そして螯はさみの恐ろしく力強い形がそれに或る美しさを附与している。その力を表現するためには、うんと墨を重ねて濃くする必要があるらしい。それで今度は墨の重ね方の研究を必要とすることになった。

前に寺田先生の墨流しの研究で、水面に墨膜すみまくを作つておいて、その真中まんなかに第二の墨滴ぼくてきを落してやると、その墨が前の墨膜上に一様に拡ひろつて行くという実験がされてある。その時、後の墨が前の墨膜上に拡がる速度とか、その到達する距離とか、両者の境界がはつきりつくかばけてしまうかということは、前に墨膜を作つてから、次の墨汁を加えるまでの時間によつてきまることが分

っている。この実験では、墨膜は水面上に浮いているので、乾燥の問題ははいらない。それで両者の墨の融合の度合は、時間と共に墨膜の墨の実質が変化する度できまらしい。

紙に描いた場合は、この墨膜の性質の変化と、外ほかに前の墨が乾燥するための影響があるので、話はもっとむづかしくなる。それに濡ぬれている間と乾いてからの効果の著しい差が、初めのうちは見当がつかないので、大分失敗した。それでも色々やって見ているうちに、そのこつも少しはのみこめた。

螯脚の力の表現はこれで出来たとして、爪つまようじ楊子のような弱々しい細い歩脚がこれと何らかの意味で釣合つて、とにかく生存をつづけている蟹として完成している姿を作るには、ちよつと工夫

が要^いりそうだった。それには一つ巧いことを思いついた。それは秦^{はた}さんの所で見た蟹の絵である。

秦さんは、足^{あしかが}利時代の墨絵を沢山集めていたが、或る時蟹を一匹描いた小品を手に入れて以来、もう外の絵はいらなくなったという執心ぶりをその絵に示していた。その蟹はなるほど名品であつて、少し身を起^{おこ}して石の上に立ち上ろうとした姿が如何^{いか}にも生きていた。よく見ると、どうもその秘訣^{ひけつ}の一つは、歩脚の先の指節にあるらしく、針のように細いしかし強い線で描かれた指節の突端が、石に喰^くい入っていた。それが効^きいているらしい。

それで早速それを応用して見ることにした。結果はなかなかの好成績である。少し氣^{とが}が咎^{とが}めるが、絵が巧く出来たのだから、ま

あ我慢することにしよう。こういう時に、創意は摸倣もほうの集積なりという言葉は、ちよつと便利である。

こうして名画が出来上つて見ると、今度はその上に素晴らしい賛が欲しくなった。今までの賛は大抵女学生向きだとの吉田さんの評が前にあつたので、一つ相談をして見た。「自然は人間よりも空想的であるというのはどうだろう」と聞いて見たら「今度の蟹はなかなか傑作だから、一つ僕が賛をしよう。その文句をラテン語に翻訳して書いてやろうか」と言う。吉田さんのラテン語には私は余り信用を置いていないので、それは断つた。そしたら「それでは英語で我慢しよう」と言つて、速座に「To create is di vine; To imagine, human」と書いた。こういう文句がすらすらと

出るようなら、あるいはラテン語でもよかったかもしれないと思
った。

賛といえ、これはなかなか大切なものである。絵の方が巧く
行かない時でも、適当な配置を考えて、ちよつとはぐらかすよう
な文句を書いておくと、大抵の人はその方に氣をとられるらしい。
もつともいつか東京から或る有名な先生と、聡明そうめいをもつて鳴る
その奥さんとが来られて、私の家を訪ねられたことがあった。話
のついでに、新しんいちらくちよう一楽帖と自称している自分の画帖を見せた。
そしたらその奥さんから「中谷さんの南画というのは、配置と文
句で胡魔化しているのね」と言われた。しかしこういう御難ごなんに遭あ
うことは稀まれれで、一般には賛を入れておいた方が通りがよい。

もつといい方法は、誰かに賛を入れてもらうことである。以前から、東京への往き帰りに、時々仙台で下車しては、小宮^{こみや}さんのところで一泊して休ませてもらって来ることがあった。南画が始まってからは楽しみが一つ増^ふえた。墨と判とをもって行つて、私が絵を描いて、小宮さんに賛をしてもらうという計略をたてたのである。

昨年の秋、まだ本気に南画を始めてから半年も経たぬというのに、大胆にもすっかり道具を持って仙台へ乗り込んだ。その時は家族のものも皆一緒だったので、子供たちを秋晴れの庭で遊ばせながら、私たちは、縁側をすっかりあけ放した広い座敷で、朝から絵を描いた。「人間一度度胸をきめれば平気さといつかおっし

やいましたが、その通りですね」というような話をしながら、私はせつせと描いた。小宮さんは「うんなかなか巧いものだ」と言いながら、片っ端から賛を入れて行かれた。世の中で何が面白いといっても、こういう楽しみなことはちよつと外にはないようである。後になってその話を悪友の一人にしたら「そうか、そんなに面白いものなら、強^しいて禁止するまでのこともないだろう」と言つた。

その時の絵の中では、コスモスがちよつとよく出来た。小宮さんは「これには俳句でなくちやうつらないな」と言いながら、頭をひねっておられた。そして後廻^{あとまわ}しにしているうちに、どんどん時間が経って、気がついたらもう汽車の時間が迫っていた。時

を惜しむというのは、こういうことを言うのであろう。「それではもう時間ですから。その絵は置いて行きますから、今度までに何か書いておいて下さい」と言ったら、小宮さんは、「うん、出来た」と筆をとって、

コスモスに句をいそがるる別れ哉かな

蓬ほう

と賛をされた。

この幅ふくが立派に表装されたところで、書斎の床の間にかけて、一人で眺め入った。そしたら仙台の秋が近々と蘇よみがえつて来た。鶉ひよどりの来る高い櫓けやきこずえの梢はすっかり秋の色にそまり、芝生しばふの中に一叢ひとむら咲き乱れているコスモスの花は、強い日差しに照り映えていた。子供たちは、広い芝生を喜んで、いつまでも馳かけ廻っている。六尺

の縁^{えん}をへだてて広い座敷には、朱の毛氈^{もうせん}がしかれ、真白^{まっしろ}な紙がちらばっていた。澄んだ秋の空気は、座敷の隅まではいって来た。そして床の間には、漱石^{そうせき}先生の詩の双幅^{そうふく}がかかっていた。一年南画を勉強して、誰の前でも平気で描くには、相当の修養^いが要る。それよりもそれを随筆に書くのは一層むつかしい。しかし人間一度度胸をきめれば、それくらいことは出来るものである。

（昭和十六年七月一日）

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎随筆集」 岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年9月16日第1刷発行

2011（平成23）年1月6日第26刷発行

底本の親本：「第三冬の華」 甲鳥書林

1932（昭和7）年

初出：「中央公論」

1941（昭和16）年7月1日

※表題は底本では、「南画《なんが》を描《か》く話」となっています。

入力：門田裕志

校正：川山隆

2013年1月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

南画を描く話

中谷宇吉郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>